

Title	本人が環境に働きかける「主体的適応力」に関する研究：ソーシャルワーク実践の本質への視座
Author	鵜浦, 直子 / 廣瀬, 雅典 / 鈴木, 貴子 / 山下, 裕史 / 岩間, 伸之
Citation	生活科学研究誌. 5 卷, p.263-275.
Issue Date	2007-03
ISSN	1348-6926
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	『生活科学研究誌』編集委員会

〈研究ノート〉

本人が環境に働きかける「主体的適応力」に関する研究

ーソーシャルワーク実践の本質への視座ー

鵜浦 直子*1、廣瀬 雅典*2、鈴木 貴子*3、山下 裕史*4、岩間 伸之*5

*1大阪市立大学大学院生活科学研究科後期博士課程

*2社会福祉法人るうてるホーム

*3社会福祉法人白寿会

*4種智院大学

*5大阪市立大学大学院生活科学研究科

A Study of the Self-directive Adaptation to the Change of Environment: Perspective for the Nature of Social Work Practice

Naoko UNOURA*1, Masanori HIROSE*2, Takako SUZUKI*3,
Hiroshi YAMASHITA*4 and Nobuyuki IWAMA*1

*1Graduate School of Human Life Science, Osaka City University

*2Lutheran Home in Osaka

*3Hakujyukai in Osaka

*4Shuchiin University

Summary

The purpose of this study was to consider the mechanism of the self-directive adaptation to the change of environment. For that purpose, we carried out a three-year follow-up research. We researched how a person had influenced environment toward forming a new own system for life, and what change of feelings he had experienced inside.

As a result, we found that the self-directive adaptation to the change of environment was influenced by the instability of his being and the awareness of the necessity for changing himself. In addition, we found that it was influenced by influence of interactional direction toward environment or by influence of one way direction.

We concluded that the mechanism of the self-directive adaptation to the change of environment was composed of eight types and found important perspectives for social work practice based on social work value by clarifying the mechanisms of these eight types.

Keywords: 適応 *adaptation*, 環境 *environment*, 主体性 *self-direction*

I 本研究の背景と目的

本研究は「本人が環境に働きかける主体的適応力に関する研究」というテーマで取り組んだものである。換言するならば、心身の変化や環境の変化に応じて自分に合致した新たな生活を築いていく「本人の力」について検証しようとしたものである。

ライフコースにおける生活の営みとは、時間の経過とともに変化していく心身の変化や環境の変化に応じて、自分に合致した生活を形成していくことでもある。とり

わけ、高齢期に入ると、心身の変化や環境の変化が顕著に見られるようになり、その変化に応じて新たな生活を築いていくことが重要な課題となる。介護保険サービスなどの社会的な支援は、こうした生活課題を解決するために機能しなくてはならない。そしてその支援は、個性や主体性の尊重といったソーシャルワークの原理・原則をもとに展開されることが求められる。

しかし、実際は、本人が主体となって自分に合致した生活を築いていくプロセスがおろそかにされ、本人の思

いや意向とは異なった生活が専門職主導で形成されてしまうことがある。これでは、ソーシャルワークの原理・原則からは乖離することになる。そうならないためには、変化に応じて自らが主体となって新たな生活を築いていく力、本論文では「主体的適応力」という概念を便宜的に用いたが、その力を十分に活用した実践が求められる。もちろんこれは、従来、ソーシャルワークにおける社会的機能や問題解決能力という概念と近いものであるが、本研究において、今回は、援助の枠組みという視点からではなく、まずは本人自身がどのように適応しようとしているのかを検証するという今後につながる研究の基礎部分に焦点を当てた。

このような基礎部分に焦点を当てるということは、近年、ソーシャルワーク実践において重視されているストレンクス (strengths) やエンパワメント (empowerment) といった概念に基づく実践の検証にも深く関係するといえる。ストレンクスやエンパワメントは、個人、グループ、家族、コミュニティの「できること」と「強み」に焦点を当て、当事者たちがそれらを活用し、強化することによってニーズの充足を行おうとするものである。「主体的適応力」の検証は、変化に応じて本人が自分に合致した生活を形成していく力を見極め、それを援助に活かすという点から、ストレンクスやエンパワメントに基づくソーシャルワーク実践のあり方の検証の一助となるはずである。

Ⅱ 本研究において用いる用語の概念整理

1. 「主体的適応力」

1) 「主体的適応力」の概念

本研究は、心身の変化や環境の変化に応じて自分に合致した新たな生活を築いていく「本人の力」に焦点を当てているが、その力を、本研究では「主体的適応力」と名付けた。そして「主体的適応力」を「心身の変化や環境の変化に応じて、環境に働きかけながら自分に合致した新たな本人システムを形成していく力」と定義した。このように定義した理由としては、次の3点に要約することができる。

1点めに、ソーシャルワークの視座から、心身の変化や環境の変化に適応するということは、それらの変化に本人が従うのではなく、また抗うのでもなく、それらの変化と折り合いをつけながら適応していくことが求められるということである。

2点めに、ソーシャルワークの価値、とくに「主体性」という価値から「適応」を考えたとき、それは本人自らが主体となって適応していかなければならないというこ

とである。周囲が用意した適応に本人が従うのではなく、本人自らが変化に適応するために、環境に働きかけていくものでなければならない。このことを強調するために「主体的」という言葉を「適応力」に加えた。

3点めに、「主体的適応力」は単に変化に適応する力だけでなく、そこから新たに自分に合致した本人システムを形成する力も含めるものでなければならないということである。

こうした「主体的適応力」は、必ずしも最初から備わっているものではない。変化に向き合えず、常識や専門家の立場からすれば主体性を欠いたと判断できる行動をとる場合もある。しかし、本人の立場からすれば、それは本人なりの思いのもとにとった行動であり、本人の「主体的適応力」としてみなすことができる。けれども、それをそのまま是として認めるものでもない。定義に示したような段階にまで高めていくことが最終的には求められると考える。ソーシャルワーカーはその高めていくプロセスにかかわることが求められる。しかし、そのためには、本人の現時点における主体的適応力がどのようなものであるのかを把握することが不可欠であり、その理解が心身の変化や環境の変化に応じて新たな生活を築く本人を支援するソーシャルワーク実践につながる。

2) 主体的適応力が機能するプロセス

主体的適応力が機能するプロセスを図1に示した。まず心身の変化や環境の変化により、本人の生活に不具合が生じる。その不具合によって生じたストレスが引き金となって、本人に内的変化が起こる。その内的変化を受けて、本人は不具合を調整するために環境への働きかけを行い、新たな本人システムが形成されることになる。主体的適応力は、本人の内的変化と環境への働きかけの部分に相当し、それらのあり方によって主体的適応力の状態は変わる。

本研究においては、このプロセスを前提に、心身の変化や環境の変化を受けて、どのような内的変化が生じたのか、またその内的変化を受けて現れる環境への働きかけはどのようなものであったのかについて分析し、主体

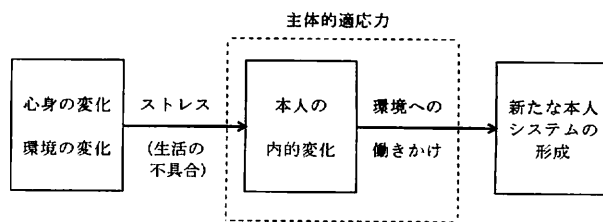


図1 「主体的適応力」が機能するプロセス

的適応力のメカニズムについて検証した。

3) ソーシャルワークにおける「主体的適応力」がもつ意味

パールマン(Perlman,H.H)は「ケースワーク過程の意図するものは、その人自身が当面する問題に対処するように助け、この方法によって彼の将来の生活に安定性をもたせるようにすることである」¹⁾と述べ、ソーシャルワークが目指す問題解決とは本人が主体的に問題を解決することができるようにすること、つまり本人の問題解決能力(workability)を向上させることの重要性を主張している。この考え方は、ソーシャルワークの共通する基本的視座でもある。

こうしたソーシャルワークにおいて「主体的適応力」がもつ意味について、次の5点から指摘しておく。これらは本人の主体性を尊重したソーシャルワーク実践や問題解決能力を高めるために不可欠な要素であるといえる。

①本人を起点とした援助

本人を起点とした援助は、本人の主体性の尊重に基づいた援助の出発点となることを意味する。この援助のためには、本人が問題に対してどのように感じているのかという問題に対する本人の対処方法について理解し、そこから援助の方向性を探っていくことが求められる。

本人の「主体的適応力」に着目することは、新たな本人システム形成に向けた本人の変化に対する対処方法を理解することであり、その本人の「主体的適応力」の向上に向けたアプローチは、本人を起点とした援助へとつながる。

②本人の「気づき」の促進

本人の「気づき」を促進するということは、本人が問題解決の主体者として位置づけるために不可欠となる。

本人の「主体的適応力」に着目することは、本人の変化に対する受けとめ方を知ることであり、同時に受けとめることを妨げている要因についても知ることが求められる。これらの明確化によって、本人が新たな「本人システム」の形成に向けて、自らが主体的に取り組むための気づきをうながすための援助を導き出すことになる。

③本人の現実への直視

本人の現実への直視は、問題を主体的に解決していくための重要な要素である。自分が置かれている今の現実に目を向けるということは、具体的な問題解決の方法を

自ら考え、解決に向けた一步を踏み出すきっかけとなる。

「主体的適応力」に焦点を当てることは、こうした本人の現実への直視の程度を知ることであり、本人に生じている心身の変化や環境の変化を自分が受けとめるためのプロセスを支援する方法を導き出す。

④本人による環境への働きかけ

本人自らが具体的に問題解決に向けて取り組むことの重要性は、主体性の尊重や問題解決能力の向上などの側面から指摘することができる。本人が自ら取り組むことで、本人に成長と変化がもたらされ、そのことをとおして自己に対する自信を取り戻すことができるようになる。

新たな本人システムの形成に向けて、本人の「主体的適応力」を活用することは、成長と変化をもたらすプロセスともなり、同時にそのプロセスに求められる支援のあり方も浮き彫りになる。

⑤本人の力の活用

パールマンは、自分の問題を解決するための人的資源や手段を使うことのできる動機と能力を組み合わせたものの総称として「ワーカビリティ」という言葉を用い、ソーシャルワーカーにはクライアントのこのワーカビリティを見極め、問題解決過程を進めていくことが重要であると述べた²⁾。

「主体的適応力」は、本人の変化に対するワーカビリティに焦点を当てるものでもあり、本人の「できること」「強み」という本人の力に焦点を当てて、それらを活用し、強化することによって、本人のワーカビリティを活用するための具体的な実践手法を明らかにする。

2. 「環境」と「本人システム」

本研究で用いる「環境」は、本人が、本人システムを形成するために働きかける対象でもあり、また本人システムを構成する要素でもあり、そして本人システム内が良好な適合状態であるようにやりとりをする対象であるとした。

また「本人システム」とは、本研究においては「本人と環境とが良好な適合状態にあり、本人へのサポートが提供されるシステム」と意味づけた。換言すれば、本人が自分に合致した生活を構築するために必要と考える環境と本人との間に良好な相互作用状態が生じており、本人をサポートする仕組みが成り立っている状態ということである。

ソーシャルワーク理論において「システム」という言

業を用いる場合、システム理論やピンカスとミナハンのソーシャルワーク理論がイメージされるが、これらの理論における「システム」は、ソーシャルワーカーが介入するために把握するシステムという、どちらかといえば周囲からみたときのシステムであるという傾向が強い。しかし、実際には、本人は、外部から規定されたシステムにおいて生活しているわけではないことから、もう少し視野を広げた捉え方が必要であると考えた。また主体性を尊重するというソーシャルワークの価値に基づくためにも、本人の認識を中心に据えたシステム、つまりは本人から見た世界を強調したいという考えから、本論文では「本人システム」という概念を用いた。

Ⅲ 「主体的適応力」のメカニズムを検証する事例調査

1. 事例調査の流れ

本研究は、特定の事例について、2004年から約3年の長期にわたって追跡する事例調査を実施した。その事例調査のプロセスとしては、以下のとおりである。

まず選定事例における1か月間の出来事を実際にその事例にかかわっているソーシャルワーカーから聞き取りを行った。

その聞き取りのなかから、本人の心身の変化や環境の変化で客観的に確認できる出来事を抽出した。

抽出した出来事から心身の変化や環境の変化について再整理し、その変化に対して客観的に確認できる本人の働きかけを抽出した。

そして抽出された本人の環境への働きかけに影響を与えた本人の内的変化について分析した。

このプロセスは、月1回の頻度で開催した事例研究会で繰り返し行われた。

事例研究会には、事例の情報を提供していただいたX市の地域包括支援センター（事例調査開始時は在宅介護支援センター）所属のソーシャルワーカー（以下、ワーカーとする）と、Y市にある特別養護老人ホームの社会福祉士、筆者等を含めた計5人で、計27回開催した。

なお、心身の変化や環境の変化と本人の働きかけについては、客観的に確認できるという基準で抽出した。心身の変化と環境の変化は、誰も把握できないなかで起きることもあり、また本人の環境への働きかけについても同様のことがいえる。これらの現象を含めて検証することは非常に難しく、また客観性を担保できないとの考えから、客観的に確認できた変化や対応についてのみ扱うこととした。

2. 事例調査の対象

事例調査の対象は、介護保険サービス等の社会サービスが必要となり始めている、あるいは利用し始めたばかりの事例で、なおかつ長期にわたってその経過を追跡することができる事例を選定した。

介護保険サービス等の社会サービスを必要とし始めている事例は、心身の変化や環境の変化に応じて、自分に合致した新たな本人システムを形成し始めた事例ともいえる。その形成過程に焦点を当てることで、そこに働く主体的適応力を明らかにすることができる。

本研究において選定した事例は、3事例で、いずれも在宅生活を送る高齢者で、70歳代の男性A氏の事例、70歳代の女性B氏、80歳代の女性C氏の事例であった。

本論文においては、70歳代の男性A氏の事例をとりあげた。これに関しては、A氏の事例を除いて、本人の心身の変化及び環境の変化の具合から、残りの2事例については検証できるまでの変化がまだなかったことと、またA氏の事例には大きな心身の変化や環境の変化が相当程度見られたので、A氏の事例をもって一般化することは困難であることを承知しながらも、徹底して深く考察することで検証できうと判断した。

なお、本研究は、3年計画の研究ではあるが、A氏は事例調査を実施してから約1年を経過した時点で死亡した。したがって、本論文ではA氏が亡くなるまでの1年間の中で、1か月ごとに行ったソーシャルワーカーからの聞き取りによって確認できたA氏に起きた心身の変化や環境の変化を扱い、それらの変化にA氏はどのように適応しようとしたのかについて検証した結果を報告する。

なお、事例調査の実施にあたっては、本人とワーカーの所属機関から承諾を得た。また報告にあたっては事例の本質や焦点が損なわれない範囲において、特定の事例として判明できないように配慮した。

3. 事例調査の結果

1) 事例の概要

A氏は74歳であった。一人暮らしで、離婚した家族がいるが、その家族とは音信不通であった。昔から人のかかわりが苦手な親しい友人もおらず、近隣からも孤立した生活を送っていた。

十年ほど前に膀胱ガンを患い、治療中であったが、自ら治療を中断した。そしてこの頃から借金をするようになった。生活するには困らない程度の年金収入はあったが、そのほとんどを借金の返済に充てており、経済的に苦しい状況にあった。また国民健康保険の保険料は支払

っておらず、未加入の状態であった。

ワーカーがかかわるようになったのは、A氏が「どうせもう治らないから」と10日間以上食事を取らず倒れて入院するということがあってからである。

A氏はよく「もういいです」と言い、借金や膀胱ガンに関しては「どうせ死ぬからどうでもいい」という態度であった。

A氏が利用している社会サービスは、X市が行っている配食サービスであり、介護保険サービスを利用することについては、「もういいです」と言って拒否し続けた。

2) 事例の結果

A氏の事例において抽出された出来事は、表1で示した6つであった。またA氏の事例調査の結果を一覧にしたものを表2に示した。以下、抽出された出来事ごとに、事例研究会をとおして確認した①本人の心身の変化と環境の変化と②本人の環境への働きかけ、そして③本人の内的変化について述べていく。

表1 抽出した出来事

	出来事の概要
出来事1 (2004.6)	家の前の自動販売機でジュースを購入しようと外出したら、家に帰ることができなくなった。
出来事2 (2004.6)	ソーシャルワーカーが配食サービスの料金をもらいに行くと、本人はとてもし落ち込んでいた。
出来事3 (2004.9)	買い物帰り、薬局の前で転んで動けなくなった。
出来事4 (2004.10)	デイサービスの利用についての説明をケアマネジャーから受ける。
出来事5 (2004.11)	夜、配食を届けようと訪問すると本人不在。翌日、訪問しても不在であった。
出来事6 (2004.12)	鳥取から連れ戻され、年末年始は自宅ではなく、ショートステイを利用して、施設で過ごすことになった。

(1) 出来事1 [家に帰れなくなる (2004.6)]

朝、家の前の自動販売機でジュースを買おうと外出したら、自宅へ戻れなくなってしまった。

①本人の心身の変化と環境の変化

【記憶力の低下】

A氏は家に帰れなくなったときのことを断片的にしか覚えておらず、「どうしてあんなことになったのか自分でもわからない」と話しており、記憶力が低下しつつあるという心身の変化を確認した。

②本人の環境への働きかけ

【自分でできるから社会サービスは必要ないと断る】

ケアマネジャーとワーカーは、地域福祉権利擁護事業やヘルパーを利用してはどうかとA氏に話した。しかしA氏は「自分でできるからいい。配食サービスだけで十分である。ヘルパーが来るのはわずらわしい。自分でできるので必要ない」と断った。

【徘徊探知機を利用したいと話す】

地域福祉権利擁護事業とヘルパー利用の説明と併せて、徘徊探知機についても説明したところ、「そんなのがあるんですか。それならぜひ使いたい」と話した。

【カートを使用して外出するようになる】

A氏は以前から買い物をした帰りには、荷物を運ぶためにスーパーのカートを持ち出していたが、この出来事以後、スーパーへ向かうときにも使用し、カートがA氏の歩行の支えとして使用されるようになった。

③本人の内的変化

【自分で自分を把握できなくなることが怖い】

A氏は、この出来事以後、しばらく「外出が怖いから出かけない。外に出ると、どこに行くか分からないから出かけない」と話した。このことから、自分の行動を自分で把握できなくなりつつあると感じ、そのことに対する怖さを感じたと判断した。

【何らかの対策をとらなくてはいけない】

A氏は、地域福祉権利擁護事業とヘルパー利用については断っているが、カートを使用して外出する。このことから、社会サービスまでは必要としてないが、何らかの対策をとる必要があると感じたのではないかと判断した。

【今の生活を変えたくない】

A氏はもともと人との付き合いを苦手としていた。ヘルパー等のサービスを利用すると、その苦手な人との付き合いをしなければならない。さらには、今までの生活も一変することになる。A氏が「自分でできるから」とサービスの利用を断ったり、「ヘルパーが来るのはわずらわしい」とも話したのは、A氏が苦手なことと直面することを嫌がり、そして今の生活を変えたくないという気持ちが反映していたのではないかと判断した。

(2) 出来事2 [家のなかで落ち込んでいる (2004.7)]

ソーシャルワーカーが配食サービスの利用料をもらうために訪問すると、家の中が真っ暗で、A氏はひどくがっかりした様子でした。

る。薬局まで迎えに来て欲しい」という連絡が入った。ケアマネジャーが迎えに行き、確認したところ、A氏は買い物帰りに薬局の前で転倒し、歩行の支えとなっていたカートがそばにあったということであった。

①本人の心身の変化と環境の変化

【企業年金の縮小】

A氏の話から、以前、勤めていたスーパーの企業年金の支給縮小の案内が届いたという環境の変化を確認した。

【借金の取り立てが頻繁になる】

このころ、配食サービスを届ける4回に1回は、借金取りの人に出くわしていたことから、借金の取り立てが頻繁に行われるという環境の変化を確認した。

②本人の環境への働きかけ

【借金の取り立てには応じない】

配食を届けに行っている人から「ここ1か月くらいよく鍵がかかり、名乗らないと開けてもらえない」と報告があった。またドアを何度も叩いてもA氏からの応答が受けられずにいる借金取りの姿が目撃されており、A氏は、鍵をかけ、取り立てに対する訪問には応じなかった。

③本人の内的変化

【自分の境遇に嫌気がさす】

A氏は、企業年金支給縮小の案内をソーシャルワーカーに見せながら、「こんなのを読んで外出する気をなくしました。外に出てもまたどこに行くかわからない」と話した。このことから、出来事1と合わせ、次から次へと起こる問題にうんざりし、自分の境遇に嫌気がさしたと判断した。

【追いつめられても、どうすることもできない】

借金が返済できないなかで、借金の取り立てが来てもどうすることもできない、また借金取りの訪問に応じたとしても、返って自分を悲惨な状況に追い込まれてしまうのは目に見えている。こうした状況において、A氏はどうすることもできなくなったのではないかと判断した。

(3) 出来事3 [薬局前で転倒する (2004.9)]

A氏宅から300メートル離れた薬局の店員からケアマネジャーに「Aさんが転んで動けなくなってい

①本人の心身の変化と環境の変化

【転倒が増え、足腰が弱くなってきた】

この出来事の翌日、ケアマネジャーとソーシャルワーカーがA氏宅を訪問し、A氏は「転んだらひとりでは起きあがれない。前日の前にも何度もあった」と話した。このことから頻回に転倒し、足腰が弱くなってきたというA氏の心身の変化を確認した。

②本人の環境への働きかけ

【ヘルパー利用をお願いする】

出来事3の後、外出しようとしたA氏は「外出しようと思ったけど怖くてやめた。転んだらひとりで起きあがれない」「買い物に行くのも怖くなった」と話した。その言葉を受けて、ソーシャルワーカーは、ヘルパーに買い物に行ってもらえばどうかと勧めたところ、本人は一度は「気の毒なんです」という返事をして迷いを見せた。しかし、ソーシャルワーカーがお金を払ってヘルパーを利用するということを説明すると、しばらく沈黙した後、はっきりとした声で「お願いします」と返事した。

【1年ぶりに病院へ行く】

膀胱ガンで入院したところから、どうせ治らないからと病院に行くことを避けてきた。しかし、ヘルパーの利用に伴って必要であるということから、病院に行くことを承諾し、受診をした。

【市役所に相談に行くことを決心する】

要介護認定を受けるために受診した際、健康保険に加入していないことを医師から強くのがめられた。そこで、付き添った保健師が「健康保険のことを市役所に相談しに行きましょう」と声をかけたところ、本人は「そうですね」と返事をした。

【カートに代わる新たな支えを作る】

A氏は、この出来事3の後、今度は以前から家にあった小さい荷車のようなものにリュックをくくりつけ、それを支えに歩くようになっていた。これについて、本人は「若いときに作った。これを持つと安定する」と話した。

【家の掃除をする】

A氏は、X市の軽度生活援助事業を利用して、家の掃除をした。掃除をする前日まで「助かります」と言っていたが、当日15分前になると面倒くさそうに「もういいですわ、もう」と言った。しかし、そのまま掃除を続けると、A氏もゴミを捨てるなどして手伝おうとした。

【デイサービスを利用したいと話す】

軽度生活援助事業を利用して掃除をしている際、ソーシャルワーカーが入浴について確認したところ、銭湯が遠くにあり行くことができず、体を拭くだけになっているとのことだった。そこでデイサービスを紹介しますと、「それはいいですね」とかなり乗り気になった。一日中施設にいることになることを説明しても「入浴したい」と話した。

③本人の内的変化

【外出するのが怖い】

A氏は、出来事1の後、カートを使って歩くようになり、一人きりでの外出も依然と変わらず行えるようになっていた。しかし、今回の出来事の後、「外出しようと思ったけど怖くてやめた」「買い物に行くのも怖くなりました」と話したことから、A氏は再び外出に対する怖さを感じたと判断した。

【もう自分ひとりの力だけでは対応できない】

A氏は、これを使えば大丈夫であろうと考えていたカートで転倒してしまったということに驚き、差し迫った危機感を感じたと思われる。また「買い物に行くのも怖くなりました」ということから、生活にも支障が出てきたことを実感したと思われる。そして、A氏は「転んだら一人では起きあがれない。昨日の前にも何度もあった。そのときは通りすがりの人に助けてもらった」と話した。これらのことから、A氏は、もう自分ひとりの力だけでは対応できなくなっていることを実感したと判断した。

(4) 出来事4 [デイサービスの説明を受ける(2004.10)]

A氏がデイサービスの利用に乗り気であったことから、ケアマネジャーがデイサービスの説明を行った。するとA氏はきょとんとした顔をし「頭の回転が他人とは違うので困ります」「若い人はみんな早いですけど、私はついていけません」と話した。

①本人の心身の変化と環境の変化

【理解力の低下】

A氏は「頭の回転が他人とは違うので困ります」「若い人はみんな早いですけど、私はついていけません」と話したことから、理解力の低下がみられるようになったという心身の変化を確認した。

②本人の環境への働きかけ

【健康保険の相談をしに市役所に行くことを拒む】

「やっぱり面倒くさい。市役所は冷たい」「ゆっくり話も聞いてられないのでしょうけどね」と話し、健康保険の相談をしに、市役所へ行くことを拒否した。

【デイサービスの利用を断る】

A氏が1年ぶりに受診した際、高血圧症と診断され、また保健師からも通院をしていないことでデイサービスの利用を事業者側から断られるかもしれないと言われた。そのためデイサービスを利用するためには、やはり通院できるように健康保険の相談をしに市役所へ行くことが求められたが、A氏は市役所に行くことを拒み、デイサービスの利用も断った。

③本人の内的変化

【話についていけない】

ケアマネジャーからの説明に対し、A氏は「頭の回転が他人とは違うので困ります」「若い人はみんな早いですけど、私はついていけません」と話したことから、自分でも周囲の話す内容をすぐには理解できなくなっていることを実感したと思われる。

【理解できない状況に混乱し、不安になる】

ワーカーの話によると、これまでもA氏は、ケアマネジャーやソーシャルワーカーに対して「もういりません!」と強い口調で拒否することがあった。こういう態度を示したときは、たいてい一気にサービスや手続き関係の説明がされているときであったようである。今回もこれと同じような状況であり、ケアマネジャーからの説明が理解できなかったと思われる。こうした理解できない状況に対し、A氏は混乱し、不安になったと判断した。

(5) 出来事5 [配食を届けようとするも不在(2004.12)]

ケアマネジャーとソーシャルワーカーが訪問を予定していた前日の夜、配食を届けに行った人から「A氏が家にいない」との連絡を受けた。翌朝確認に行

ったが、なおも不在であった。

①本人の心身の変化と環境の変化

【借金の取り立てが頻繁になる】

A氏の所在を確認するために訪問した際、借金取りからのメモなどが玄関に多数落ちていたことから、借金の取り立てが頻繁になっていたことが確認できた。

【失禁がひどくなる】

A氏は、この出来事から2週間後に発見され、その後、ショートステイを利用することとなった。その間ソーシャルワーカーなどの支援者がA氏宅を掃除したところ、家の中は失禁の臭いが充満し、布団にも失禁の跡が残っていた。このことから失禁がひどくなっているという心身の変化を確認した。

②本人の環境への働きかけ

【誰にも告げることなく、鳥取へ出かける】

A氏がいなくなってから1週間ほど経ったとき、民生委員から「A氏の近所の家に『あなたの家にA氏さんという人はいますか』という連絡が鳥取から入った」という報告があった。その後、警察からも市役所に連絡が入った。このことから、A氏は誰にも告げることなく、鳥取へ出かけていたことがわかった。

③本人の内的変化

【今の生活に意味や価値を見いだせない】

A氏が発見されたときの話のなかで、A氏は「こっちは戻ってきたらだめですね。何もする気がしない。ここでの生活が嫌になった」と話した。A氏の家には多くの借金関係の通信物が届いていたことから、借金の額は相当のものであり、簡単に返済することは不可能であったと推測される。そのようななかで、借金の取り立てが頻繁に行われ、そしていつまでも繰り返されるこうした状況に嫌気がさし、このままここで生活を続けていくことに意味や価値を見いだせなくなったと判断した。

【心身の変化への対応がしんどい】

また借金の問題に加え、膀胱ガンや高血圧などの病状を抱え、失禁などの症状もひどくなり、自分の心身の変化に対応していくことのしんどさも感じていたのではないかと判断した。

【今の自分の存在に意味や価値を見いだせない】

A氏がX市へ戻ってきたとき、ワーカーは「鳥取はどうでしたか」と尋ねたところ、A氏は「よかったです」と答えた。そして「どうして鳥取に行ったのか」と聞くと、「修学旅行に行っ、家族でも行ったことがあって、思い出があって…」と話した。このことから鳥取は、A氏にとって、体が元気で今のような問題はなく、家族もそばにいた頃の自分を思い出させてくれる場所であったといえる。こうした場所に行くことで、もう一度自分に自信と価値を見いだしたいと考えたのではないかと判断した。しかし、裏を返せば、これは、今の生活においては、自分の存在に意味と価値を見いだせなくなっているということであることがわかる。

(6) 出来事6 [鳥取から連れ戻される (2004.12)]

誰にも告げずに鳥取へ出かけてから約2週間が経過した日、A氏は市役所の職員とともにX市へ戻ってきた。そして帰ってきたその足で、緊急のショートステイを利用し、年末年始を施設で過ごした。

①本人の心身の変化と環境の変化

【元の生活場所へと戻る】

A氏の話では、ずっと鳥取に居続けるつもりでX市を離れたようであったが、鳥取での宿泊先からの連絡により、再びX市に戻ってきた。

【判断能力の低下が疑われる症状がみられる】

鳥取の宿泊先の従業員の話によると、A氏は散髪しに出たまま戻ってこなかったり、部屋を水浸しにしてしまったり、洋服も着ずに廊下をうろろしたりと、判断能力の低下が疑われるような行動が見られたとのことであった。またA氏に鳥取の話を知ると、記憶が曖昧で、聞くたびに違うことを言っていた。以上から、A氏に判断能力が低下しつつあるという心身の変化を確認した。

【失禁がひどくなる】

A氏は、ショートステイから帰ってきたあと、シーツがよく濡れるようになり、失禁がひどくなってきているという心身の変化を確認した。

②本人の環境への働きかけ

【ヘルパーの利用をお願いする】

ショートステイを利用している間に、ヘルパーの利用についてA氏に確認したところ、「もう一人では無理です。家は自分のものではないのでお願いします」と話した。

【失禁を布団で隠して大丈夫と言う】

ショートステイから帰ってきてから、失禁がひどくなってきたことから、排泄について大変ではないかと確認したところ、A氏は失禁の跡を布団で隠して「大丈夫です」と返事をした。

【一度利用したヘルパーを断る】

ショートステイの際にお願いしたヘルパーと一緒に銀行まで年金をおろしに行き、その帰りにスーパーへ寄って買い物をしたが、それから約2週間後、A氏は「ヘルパーはいらない。わずらわしい」と断ってきた。

【シーツ交換のためのヘルパー利用をお願いする】

失禁でシーツを濡らしたままにしておくことは風邪を引く可能性もあり、また衛生面でも問題があるというこ

とで、週1回はシーツ交換のためにヘルパーに入ってもらうように提案すると、本人は「そうですね」とヘルパー利用を頼んだ。

③本人の内的変化

【X市でまた生活していくほかない】

X市へ戻ってきたとき、A氏は「役所に見つかったらだめですね。連れ戻されました」と話していた。そのことから、A氏は役所に見つかったら戻ってくるしかない、X市でまた生活していくほかないと観念したと判断した。

【社会に助けてもらうしかない】

A氏は、ヘルパー利用の確認の際、「もう一人では無理です。家は自分のものではないのでお願いします」と

表2 A氏の事例調査の結果一覧

	概要	心身の変化や環境の変化	本人の内的変化	環境への働きかけ
1	家の前の自販機でジュースを購入しようと外出したら、家に帰ることができなくなった(2004.6)	○記憶力の低下[心身の変化]	○自分で自分を把握できなくなるのが怖い ○何らかの対策をとらなくてはいけない ○今の生活を変えたくない	○自分でできるから社会サービスは必要ないと断る ○徘徊探知機を利用したいと話す ○カートを使用して外出するようになる
2	ソーシャルワーカーが訪問すると、本人は真っ暗な部屋のなかでがっかりしていた(2004.6)	○企業年金の縮小[環境の変化] ○借金の取り立てが頻繁になる[環境の変化]	○自分の境遇に嫌気がさす ○追いつめられても、どうすることもできない	○借金の取り立てには応じない
3	買い物帰り、薬局の前で転んで動けなくなった(2004.9)	○転倒が増え、足腰が弱くなってきた[心身の変化]	○外出するのが怖い ○もう自分ひとりの力では対応できない	○ヘルパー利用をお願いする ○1年ぶりに病院へ行く ○市役所に相談に行くことを決心する ○カートに代わる新たな支えをつくる ○家の掃除をする ○デイサービスを利用したいと話す
4	デイサービスの利用についての説明をケアマネジャーから受ける(2004.10)	○理解力の低下[心身の変化]	○話についていけない ○理解できない状況に混乱し、不安になる	○健康保険の相談をしに、市役所に行くことを拒む ○デイサービスの利用を断る
5	夜、配食を届けようと訪問すると不在。翌日、訪問しても不在であった(2004.11)	○借金の取り立てが頻繁になる[環境の変化] ○失禁がひどくなる[心身の変化]	○今の生活に意味や価値を見いだせない ○心身の変化への対応がしんどい ○今の自分に意味と価値を見いだせない	○誰にも告げることなく、鳥取へ出かける
6	鳥取から連れ戻され、年末年始は自宅ではなく、ショートステイを利用して、施設で過ごすことになった(2004.12)	○元の生活場所へと戻る[環境の変化] ○判断能力の低下が疑われるな症状がみられる[心身の変化] ○失禁がひどくなる[心身の変化]	○X市でまた生活していくほかない ○社会に助けてもらうしかない ○積極的に生活していく気持ちになれない	○ヘルパーの利用をお願いする ○失禁を布団で隠して「大丈夫」と言う ○一度利用したヘルパーを断る ○シーツ交換のためのヘルパー利用をお願いする

話した。鳥取へ向かった要因の一つは、心身の変化に対応することのしんどさであったのではないかということであった。しかし、再びX市で生活しなければならなくなった今、A氏はもうそのしんどさを一人で耐えることはできないと考え、社会サービス等を利用することで軽減していくしかないという感情を抱いたと判断した。

【積極的に生活していく気持ちになれない】

A氏は、鳥取に居続けるつもりでX市を離れたが、その意思に反して連れ戻されてしまった。このことから、ここに住み続けるしかないと観念したものの、自ら主体的に生活を再構築していこうといった積極性はなかったと判断した。

IV 主体的適応力のメカニズム

事例調査の結果を踏まえたうえで、本人の内的変化と本人の環境への働きかけの特徴について検証した。その結果、本人の内的変化に関しては「『存在』の揺れ」と「変化の気づき」という2つの内的変化があり、これらの有無が主体的適応力の状態に影響を与えていることがわかった。また本人の環境への働きかけについては、「一方向性志向」と「双方向性志向」という2つの働きかけがあることがわかり、主体的適応力の状態に影響を与えていることがわかった。以下、それぞれ順に述べる。

1. 本人の内的変化

1) 本人の「『存在』の揺れ」の有無

ここでいう「『存在』の揺れ」とは「自分が今ここにいることを許されていない」と感じたり、「自分で自分という者がわからなくなっている」あるいは「何者かによって自分という『存在』が脅かされている」といったような心理状態のことを指す。

このような内的変化がみられた例をあげると、出来事1の「自分で自分を把握できなくなるのが怖い」、出来事2の「自分の境遇に嫌気がさす」と「追いつめられても、どうすることもできない」、出来事4の「理解できない状況に混乱し、不安になる」、出来事5の「今の自分に価値と意味を見いだせない」であった。

これらの内的変化に基づいた本人の環境への働きかけは、事例調査の結果からみて、自分の「存在」を守るという方向に向かう形で現れる傾向が強い。その一方で、「『存在』の揺れ」を確認できなかった出来事3や出来事6においては、本人の環境への働きかけが福祉サービスを利用しようとするなど、周囲とかかわりを持ちながら、新たな生活を築く方向に向かっている傾向にあった。

このことから、「『存在』の揺れ」の有無は、主体的適応力の状態に影響を与える要素として捉えることができる。

2) 本人の「変化への気づき」の有無

次に、本人の「変化への気づき」の有無であるが、ここでいう「変化への気づき」とは、心身の変化や環境の変化によって生じた生活の不具合を調整しなければならないと気づいたり、新たな本人システムの形成に向けて、自分自身も変化に応じて変わっていかなくてはならないといった気づきを含むものである。

このような内的変化が生じた例をあげると、出来事1の「何らかの対策はとらなくてはならない」、出来事3の「もう自分ひとりの力だけでは対応できない」、出来事6の「社会に助けをもらうしかない」である。

出来事1におけるA氏は、社会サービスの利用を拒否してはいたが、カートを使用するなど自分なりの対策を講じてはいた。このことから、何らかの対策はとらなくてはならないという気づきはあったということである。

またこれまでヘルパーの利用を断り続けていたが、出来事3をきっかけに、その利用をお願いするといった態度に変化している。こうした働きかけを生み出した内的変化は、自分だけの力では対応できないと観念し、人の手を借りなければならないと感じたことであった。この内的変化は、変化を素直に受け入れ、社会とともにその状況に適応していこうという気持ちが生じたともいうことができる。

また、出来事6においても、こうした変化への気づきを確認することができた。しかし、出来事3とは異なり、ヘルパーの利用をお願いするも、一回でその利用を断っている。A氏は、今の生活が嫌で鳥取まで逃げたが、連れ戻されてしまい、自分の人生は自分の思いどおりにはならないとあきらめにも近い感情を抱いたといえる。そのことで、本人の主体的な気づきによる変化の受け入れというよりも、周囲の言いなりのまま変化を受け入れる形となり、その結果、社会サービスを利用するも、すぐに断ることになったといえる。

このように変化の程度には違いがあるものの、ともに「変化への気づき」があり、社会とかかわりを持つようとしている。一方「変化への気づき」を内的変化において確認できなかった出来事2や出来事4、出来事5では、周囲とかかわりを避けようとしていた。このことから「変化への気づき」の有無も主体的適応力の状態に影響を与えていると判断できる。

2. 本人の環境への働きかけ

本人の環境への働きかけには、自分を取り巻く環境と共に、また新たな環境も巻き込みながら、新しい「本人システム」の形成に向けて環境へ働きかけるものと、社会との接触を極力避け、自己完結的になされるものの2つに分類することができた。本研究では、前者を双方向性志向、後者を一方向性志向と名付けた。

1) 双方向性志向

A氏の事例において、自分を取り巻く環境と共に、また新たな環境も巻き込みながら、新しい「本人システム」の形成に向けて環境へ働きかける「双方向性志向」の働きかけの特徴が見られたのは、出来事3と出来事6であった。この2つの出来事のなかから確認した本人の働きかけは、ヘルパー利用をお願いしたり、病院に行ったり、市役所に相談に行くことを決心したりするなど、周囲の支援を受け入れながら、また周囲と交渉しながら、新たな本人システムを形成しようとするものであった。これらは、環境と新たな本人システムの形成に向けて相互作用を起こそうとしている。このことから双方向性志向の働きかけとして捉えることができる。

2) 一方向性志向

本人の環境への働きかけが社会との接触を極力避け、自己完結的になされる「一方向性志向」の働きかけとして捉えることができたのは、出来事1と出来事2、そして出来事4と出来事5であった。これらの働きかけは、ヘルパーを利用することを拒否したり、借金の取り立てには応じなかったり、誰にも告げることなく鳥取へ出かけるなど、自分の力だけで何とか解決しようとしたり、環境からの働きかけを最小限にしようとしていることがわかる。これは、自己完結的に新しい「本人システム」の形成に向けて働きかけているということである。つまり、一方向性志向の働きかけとして捉えることができるということである。

3. 主体的適応力の8類型

主体的適応力の状態に影響を与える要素として、「『存在』の揺れ」の有無と「変化への気づき」の有無という2つの内的変化、そして「双方向性志向」と「一方向性志向」の特徴をもつ環境への働きかけを確認したが、実際には、これらの要素は一つひとつ組み合わせられて、主体的適応力に影響を与えていると考えられる。

その組み合わせを明らかにするために、各要素を順に組み合わせると、主体的適応力は8類型になった。その組み合わせは、表3に示した。また出来事1から出来事6の主体的適応力がどの類型に該当するかは表4において示した。

まず主体的適応力の8類型に関しては、内的変化において、「『存在』の揺れ」の有無と「変化への気づき」の有無の組み合わせによって、4つに類型化される。そして、一方向性志向か双方向性志向の本人の環境への働きかけの違いによって、最終的に主体的適応力が8類型に類型化される。

A氏の事例における主体的適応力の類型をみると、出来事1では、まず内的変化において、自分という存在がどうなっていくのか分からない不安を抱えているという「『存在』の揺れ」はあるが、生活の不具合を調整しなければならないという変化への気づきを確認することができる。それを踏まえたうえで、本人の環境への働きかけをみると、一方向性志向であった。その結果、出来事1における主体的適応力は、類型2に該当すると判断できる。

出来事2と出来事4、出来事5に関しては、まず「『存在』の揺れ」については、自分にはどうすることもできない、理解できず混乱し、不安になるといったことを確認できた。さらに生活の不具合を調整しなければならないという気づきや自ら変化しなければならないという気づきがないため「変化への気づき」も確認できなかった。

表3 主体的適応力の8類型

類型	内的変化		環境への働きかけ	
	「存在」の揺れ	変化への気づき	双方向性志向	一方向性志向
I	有	○	○	●
II			●	○
III		×	○	●
IV			●	○
V	無	○	○	●
VI			●	○
VII		×	○	●
VIII			●	○

表4 A氏の主体的適応力の類型

出来事	内的変化		環境への働きかけ		類型
	「存在」の揺れ	変化への気づき	双方向性志向	一方向性志向	
1	有	有	—	○	II
2	有	無	—	○	VII
3	無	有	○	—	V
4	有	無	—	○	VII
5	有	無	—	○	VII
6	無	有	○	—	VI

そしてこの内的変化を受けての本人の環境への働きかけは、一方向性志向であった。その結果、これらの出来事で見せたA氏の主体的適応力は、類型8に該当すると判断できる。

出来事3に関しては、「『存在』の揺れ」は確認できず、「変化への気づき」については、生活の不具合を調整しなければならないという気づきや自ら変化しなければならないという気づきも確認できた。また、この内的変化を受けての本人の環境への働きかけは、双方向性志向であった。出来事3における主体的適応力は、類型5に該当すると判断できる。

出来事6に関しては、「『存在』の揺れ」に関しては確認できなかった。生活の不具合を調整しなければならないという「変化への気づき」は確認できた。そしてこれらの内的変化を受けての本人の環境への働きかけは、双方向性志向であった。その結果、出来事6における主体的適応力は類型6に該当すると判断できる。

4. 主体的適応力を高めるプロセス

主体的適応力の8類型をもとに、また事例調査により分析した本人の内的変化をもとに、本人が主体的適応力を高めていくプロセスを検証すると、そこには次の3つのステップがあると推測された。それは、①直近のよりよき時代に戻ろうとするダイナミックスを経験する、②現実を直視して「新しい変化」に沿って生きていくことを覚悟する、③社会との関係のなかで折り合いをつけていく、という3つのステップであった。これらのステップを踏むことで、本人は「新しい本人システム」への形成に進んでいくと考えられる。そして、その過程においては、社会関係のなかで自分の存在が確認されること、自分らしく振る舞える環境がシステムのなかで保障されること、より大切なものを守るために、別の大切なものを手放す、という内的力動が主体的適応力を高めるうえで必要な要素であるといえる。

こうした主体的適応力を高めるプロセスにソーシャルワーカーは関わるのが求められるが、その際のアプローチについては、主体的適応力の8類型をみると、自然と見えてくる。A氏の事例を例にして述べると、出来事1における主体的適応力は類型2であるが、この類型にあたる主体的適応力を高めるためには、まずは「『存在』の揺れ」にアプローチすることが求められる。そして、変化に適応しなければならないという気づきを促すことが求められる。そのうえで双方向性志向の働きかけになるように支援することが求められることになる。

このように、現時点において本人の主体的適応力が

どの類型に該当するのを見極めることで、本人のどの部分を強化しなければならないかという焦点が明確になり、具体的なアプローチを導き出せることになる。

おわりに—今後の研究課題—

本研究では、本人が環境に働きかける「主体的適応力」に関する研究と題して、心身の変化と環境の変化に応じて自分に合致した新たな本人システムを築いていく主体的適応力に焦点を当てて検証した。

具体的には、A氏の事例を丁寧に考察することから検証した。当然のことながら、その結果については検証が足りない面がある。しかし、検証の結果明らかとなった主体的適応力の類型は、ソーシャルワークの価値に基づいた実践のあり方を示唆するものであり、ソーシャルワーカーがクライアントのどの部分に焦点を当てて援助すべきかという視点を提供するものである。

今後は、継続中の事例の分析を行い、今回、まとめた研究成果の検証に取り組む予定である。さらに主体的適応力を高めるための具体的なアプローチについて検証していく。またそれらの過程をとおして、ソーシャルワーク実践において重視されているストレングスやエンパワメントといった概念の本質へのアプローチを試みたい。

注

- 1) パールマン, H. H 著/松本武子訳: ソーシャル・ケースワーク—問題解決の過程—, 全国社会福祉協議会, 71(1967).
- 2) 同上書, 183.

参考文献

- ジャーメイン, C. B 著/小島容子編訳: エコロジカル・ソーシャルワーカーカレル・ジェーメイン名論文集—, 学苑社(1992).
- ジョンソン, L. C, ヤンカ, S. J 著/山辺朗子, 岩間伸之訳: ジェネラリスト・ソーシャルワーク, ミネルヴァ書房(2004).
- 岩間伸之: ジェネラリスト・ソーシャルワーク[1], ソーシャルワーク研究, Vol.31, No. 1, 53-58(2005).
- 岩間伸之: ジェネラリスト・ソーシャルワーク[2], ソーシャルワーク研究, Vol.31, No. 2, 54-58(2005).
- 小松源助: ソーシャルワーク実践におけるストレングス視点の特質とその展開, ソーシャルワーク研究, Vol. 22, No. 1, 46-55(1996).
- 狭間香代子: 自己決定とストレングス視点, 社会福祉学, 第40-2号(通巻61号), 19-56(2000)

Howard Goldstein: Toward the Integration of Theory and practice: A Humanistic Approach, Social Work, Vol.31, No. 5, 352-357(1986).

パールマン, H. H 著 / 松本武子訳: ソーシャル・ケースワーク—問題解決の過程—全国社会福祉協議会

(1967).

Helen Harris Perlman: Social Casework: A Problem-solving Process, The University of Chicago Press, 1957.

本人が環境に働きかける「主体的適応力」に関する研究

—ソーシャルワーク実践の本質への視座—

鶴浦 直子、廣瀬 雅典、鈴木 貴子、山下 裕史、岩間 伸之

要旨：本稿は、ソーシャルワーク実践が依拠する重要な価値である主体性の尊重、また実践を方向づける概念であるストレングスやエンパワメントの視座から、心身の変化や環境の変化に応じて、環境に働きかけながら自分に合致した新しい本人システムを形成していく「主体的適応力」のメカニズムについて考察したものである。

研究方法として、約3年間にわたる事例研究による追跡調査を用いた。その内容は、新しい本人システムの形成に向けて、①本人はどのように環境に働きかけたのか、②その働きかけが本人のどのような内的変化から生じたものなのかに焦点を当てて検証した。

その結果、主体的適応力は、本人の「存在の揺れ」の有無及び本人の「変化への気づき」の有無という2つの内的変化、さらに「双方向性志向」もしくは「一方向性志向」をもった環境への働きかけとの組み合わせによって構成されていることが明らかとなった。そして、主体的適応力はその組み合わせから8類型に整理できた。

これらの類型は、ソーシャルワークの価値に基づいた実践のあり方を示唆するものであり、ワーカーにクライアントのどの部分に焦点を当てて援助すべきかという視点を提供するものでもある。今後は、その具体的なアプローチについて検証し、また今回の研究の成果に基づいて、現在進行中の事例をもとにさらなる検証を進めていきたい。そして、それらの過程をとおして、ソーシャルワーク実践において重視されているストレングスやエンパワメントといった概念の本質へのアプローチも試みていきたい。